

# 春日燈

7  
月号

JULY 2007



# 成瀬櫻桃子の句

## 母の国へ峠を越ゆる葛の花

岩村城址能句会平成五年八月

平成五年八月師の郷里である岐阜県岩村町の公民館で、「一つおぼえ」と題し櫻桃子先生が講演をされた。その折、ご自身のことにも触れ生後間もなく父との離別、母の在所は、山一つ越えた稲武町であること。先生が学徒兵の時に、郷里を訪ねたお話等々深く感銘を受けた。

翌日の岩村句会で掲句が発表された。累々と続く葛の花の臨場感と余情の深さを感じる。忘れ得ぬ句である。

鈴木静恵

成瀬櫻桃子の句

一りんの夜の薔薇の香はわれのもの

現代俳句文庫・十九『成瀬櫻桃子句集』昭和三十八年

哀しみを纏った多くの師の句は、いつも私の心を打つ。  
世の諸々の事柄を背負って過ぎた一日、夜独り机に向か  
った時そこに置かれた一輪の薔薇が放つ仄かな甘い香。  
師は香を抱きしめたい程いとおしく思われたに違いな  
い。〈香はわれのもの〉とは全てのものから解き放され、  
自由な一人の世界を得た安らぎの一瞬だったのだと思う。  
夜の静寂と師の佇まいが目には浮かぶ一句である。

中村喜美子

# 西ヶ原日記

(32)

鈴木榮子

(千葉大会五句)

安房の鶯鳴き音惜しまず聞かせけり  
菩提樹の年輪読みて仰ぎけり  
龍之介仏恋文白日に安房のどか  
鞦韆や恋文バスケットに秘めて

笠森 観音懸崖寄棟春なりけり  
彷彿と真砂女きくのの白地かな  
菖蒲湯の日の銭湯へいそいそと  
頭痛持ち菖蒲はさむとへアーバンド  
更衣インクの色も替へしかな  
初夏の縞綿シャツの旅用意  
母の日のこの頃せつに母のこと  
林間学校亡父のポストンバック持ち

## 武蔵国分寺の辺

勝原文夫

天平の国分寺跡草隴  
講堂の経もまぼろし鳥雲に  
蝶追ふや尼僧幻影嬉々として  
斧あげて蠶螂いざや寺を守る  
葛はじめ万葉百花寺囲む  
残り蚊に注意とあるも園深く  
扉閉ぢ薬師は秘仏櫂散る  
小町再生曰くの池の水澄めり  
林内はひとり添水の音なりけり  
伝馬消え馬頭観音秋思かな

生身魂

岩岡里子

家政婦より母の日の花受けにけり  
父の写真のたつた一枚父の日や  
骨折のことは夢とも明易き  
美容院まで杖と五十歩風涼し  
効きすぎると冷房をこそ怖れけれ  
甚平や笑ふは損の面構へ  
親鸞の悪人説や紙虫走る  
小簞笥のうへに物積む夜の秋  
月宮殿ひとふし謡ふ生身魂  
豊国描く虫売の虫しぐれかな

# 当月集

鈴木 榮子選



久本久美子

春愁ひ嗣治の抱くパリの猫

百余年考へてゐる日永かな（ロダン像）

牡丹の声聞き分くるかに牡丹守

時の鐘千の牡丹の中に消ゆ

江戸を見し塔古りにけり若葉風

○ 佐々木新

紫木蓮千灯母の忌なりけり

霜くすべ厠の枢とほぞぎいと啼く

道灌にゆかりの小江戸濃山吹

鍛冶町かじまちに刃物屋あまた花の冷え

花霞磴百段をゆるると

○ 横田初美

風なりに植田の水のかがよへり

御仏は暗きに在すさくら季

鶯の楽をもてなす札所寺

春潮の音なく満つる南白亀川

卯の花や兎波馳す九十九里

○ 布村松景

小半時浮子の動かぬ春の海

釣り上げし魚の鰭より春の水

風光る鳴門の潮は八重に巻く

神輿もむ女だてらと言ふは死語

鮑屑吹き寄せられて春の風

○ 曾根京子

鳶去んで空から明きの田植かな

七十路の夢を吹き込む紙風船

観桜や濁世の声は聞き流し

田植機の音の怯まず暮れ泥む

琴の音の落花と舞ひし空の果



# 春燈の句

鈴木 榮子選



顔触れの去年と変りし花筵

大阪 中上 馥子

春昼や書店に刻を忘じをり

もろもろの芥の中の蘆の角

永き日や机上に辞書の電子音

壁の字をなぞる老婆や唇寒し（ヘルリンの壁）

東京 大森 道生

風樹の嘆桜糝ふる夕べかな

青踏んで俳諧奉行訪ねけり

お目当てのクリームコロッケ荷風の忌

掌に沈む天金の書や春の闇

手放せぬ杖となりけり暮の春

春うれひ小暗き運河辿りけり

菜種梅雨独り合点の長ばなし

築提の蛇籠の荒き春寒し

白粉に栄えし街の花名残

三重 青木 翠亭

浪音に業平の歌松の花

古事記にも見ゆる阿坂の植田かな

一領具足の碑にやはやはと花菜風

土佐の岸辺龍馬の像と春惜しむ

落人村のかづら橋揺る若葉風

遺句集に偲ぶやさしさ余花曇り

由無きことマイクの呼ばふ春の昼

ボンペイの婦人の瞳春愁

南洲像都の春に口閉ざす

噴水の穂先裏あり表あり

ラブコール鼻からませて象の春

ブロンズの朱鷺に春の日こぼれけり

下萌えやどかつと牛の横坐り

大樗雲押し上ぐる芽吹きかな

埼玉 中原 君恵

東京 伊賀山ひでを

東京 向井 芳子

# 余言

鈴木 榮子

高上った噴水の水は当然左右、裏表に分かれてその頂点で落ちる訳である。

春日遅々病は薄目あけてをり 篠原 幸子

春日遅々は冬から春になった嬉しさなのだが。とは言うものなにかはつきりしない気持なのだ。

病は薄目あけてをりーがこの作者のとぼけた味が出たところで人格のない病が薄目をあけているということはないが、そういう感じ方、詠み方が作者独特の表出である。病が薄目などという、おかしみと飘逸を持っている作者を頼もしく思う。

文学に速き恋文春の虹 荻原美保子

千葉大会で急に予定のない芥川龍之介の別荘に回るようになった。予定にないとは言え房総に避暑地を持つ東京の人と、信州に別荘を持つ方とかいろいろおられ、この急な変更は喜ばれた。

芥川荘は六畳二間に回り縁のシンブルな平家であったがここで書を読み、小説を書き気軽に友を呼ぶにはふさわしいところであった。縁には藤寝椅子が置いてあった。

龍之介の恋文は「文さん」に宛たもので、それが白い陶板の巻紙状の碑となり、来訪者の目をひいていた。

御仏は暗きに在すさくら季

横田 初美

御仏は十万億土という遠い遠いところにいらっしやる。阿弥陀如来の極楽浄土は暗いところではない。御仏は御堂の中に在しますのでー暗きに在すーのであるが、さくら季の外の明るさから御堂へ入ると気持が静まるものである。同じくへ卯の花や兎波馳す九十九里も九十九里がよく句を押さえている。

噴水の穂先裏あり表あり

伊賀山ひでを

高上る噴水はあるが、夏のものである。上野の美術館前の噴水、日比谷の噴水等はさすが堂々としている。その噴水に裏表があると言われて、はっと気がついた。

私はとうとうその恋文は読まなかった。その折の自分の心理を解き兼ねている。どうして文学者の恋文を読まなかったのであろうか。今更悔まれる。

芥川龍之介は本所の出身で生家の跡も知っていたのに。